

韓國現代
短篇小說編

中上健次編

安
宇植
訳

韓國現代
短篇小說

中上健次
編

新潮社

かんこくげんだいたんべんしょうせつ
韓国現代短編小説

編者 中上健次（なかがみけんじ）

訳者 安宇植（アンウシク）

昭和六十年五月二十日印刷

昭和六十年五月二十五日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一二 編集〇三(266)五四一一

定価 一六〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・東洋印刷株式会社 製本所・株式会社大進堂

© Shinchosha, Printed in Japan 1985

ISBN4-10-518201-3 C0097

目次

秋の死

金承鉦 キムスンオク 5

トンネル

韓勝源 ハンスンウオン 33

高麗葬

全商國 チョンサンクック 67

単独講和

鮮于輝 ソンヌフイ 107

夢見る者の羅府

尹興吉 ユンフンギル 133

罌 ワナ

朴範信 パクボムシン 201

駱駝の目玉 ラクダ

黃皙暎 フアンソギョン 223

闇の魂

金源一 キムウオニル 257

解説

中上健次 292

裝
画
・
鄭
相
和

韓国現代短編小説

安宇植^{アウシク}訳

秋
の
死

金^{キム}
承^ス
鉦^{オク}

金承鉉(一九四一〜)

日本・大阪で出生。ソウル大学仏文科卒。一九六二年「韓国日報」新春文芸公募に短編『生命演習』が当選して文壇にデビュー。日常生活の些細な事柄から問題性を発見して個体と全体の関係、愛と憎しみ、憐れみと憤怒等の人間関係を赤裸々にあばいて見せてくれる。主要作品は『妹を理解するが為に』『霧津紀行』『ソウル一九六四年冬』『或る三十歳』『野遊会』等の短編と長編小説の『僕が盗んだ夏』等。

昨夜、山に潜んでいるパルチザンの襲撃があったものだから、夜が明けてみると市街は手がつけられないくらい破壊されていた。外出先から戻った父が興奮醒めやらぬといった面持で、兄とぼくにいろいろとニュースを伝えてくれた。それによると、市の防衛隊は装備や人員において前線の戦闘部隊に劣らぬ戦力を備えていたから、パルチザンは陽が昇るころにはふたたび山へ逃げこんでしまったが、しかし、市街が蒙った被害は想像を超えるものだという話だった。ぼくの家は比較的に高台になっているところにあつたから、四方を山に囲まれているうえ、さして大きいとはいえないがたい市街は、あらかた見渡すことができた。その市街のここかしこにはまだくすぶりとつづける建物が幾つも見え、ところによっては建物がかすかに焼け落ちて空地になっているあたりから青い煙が立ち昇り、霧のように広がっていくさまが眺められた。毎朝、起きぬけに庭へでて見渡すと、前方に見える市街の中心地にあつて、昇りつめる朝の太陽の光を照り返して金色に輝くガラス窓で飾られ、そのためまるで燦然と輝く王宮のように思えた道立病院の立派な建物までがその日の朝にはすっかり変わりはて、燃え残りの木炭の固まりといったありさまになっていた。

道立病院よりもうちよつと北側に位置している防衛隊本部はいまもなお燃えつづけ、二台の消防車が消火に当たっているのが見えた。ぼくたちの市内には消防車が二台しかなかったから、

消火能力をもったすべてがあつた防衛隊本部へ集められたことになる。

防衛隊本部は、その昔たいそう大金持が住んでいたお屋敷におかれていたが、そのお屋敷は広さの点もさることながら、とにかく樹木がたくさん繁っていたから、遠目にはまるでこんもりとした森林公園といった感じのするきれいなところだった。

一昨年、六・二五（朝鮮戦争。一九五〇年六月二十五日～五三年七月二十七日）が勃発して人民軍が攻めこんできた折、そのお屋敷には人民軍の軍事本部がおかれてさまざまな施設が新たに設けられた。そして、人民軍が逃げだしてからは市の防衛隊が新しく編成され、その本部がお屋敷におかれることになったのである。

けれども、六・二五が勃発するまでは住む人としてなしに朽ち果てていくばかりだったから、ぼくたち子供にはうってつけの遊び場だった。なにしろ市内の子供ら全員が入りこんで遊んでも狭さを感じさせないくらいで、それもたんに広いというだけではなしに、ぼくらを愉しませるようにいろいろと工夫を凝らしたお屋敷だった。

乾上がった池には、ここかしこに奇妙な形をした岩がぶざまな姿をさらけだしていたが、それらを組み合わせて、柄の小さいぼくが入りこんで隠れていることも可能なくらいの洞窟のようなものまで、幾つもこしらえてあった。また、扉を開けると別の扉が行く手をはばみ、その扉を開けるとさらに別の扉が立ち塞がるといった具合に、五つもの扉をさまざまに飾りたてて取りつけた、淡い灰色のどでかい倉庫もあった。このほかにも、風のある日でさえその中に立てたろうそくの明かりは吹き消されないという石燈籠が、西洋人と肩を並べるほどの背丈で立っていた。

けれども、ぼくにとつてもつとも忘れがたかったのは、その時分はもうほとんど腐ってしまったていた畳を敷いた、奥の間だった。いや奥の間というより、その奥の間の東の壁際の床下に

つくられた地下室だった。壁際の畳を一枚あげると板を敷きつめた床が現われ、その床に揚げ板がはめこまれていて、揚げ板の下が薄暗い地下室になっていたのである。

ああ、日がな一日その地下室に入り浸りで、ぼくたちはどんなに胸のときめく遊びに耽ったことだろう。子供らの中でもとびぬけて絵が上手だったぼくが、その地下室の白っぽく見える灰色の壁にクレヨンで絵を描きはじめると、子供らの一人は残り少なくなつたろうそくに火をともしてかざし、ぼくの手の動きに合わせて壁を照らしてくれた。そしてほかの子供らは、羨望と感嘆の入り雑じつたまなざしでぼくが描き上げていく絵を眺め、それをもとにさまざまな物語をつくりだして語り合い、騒ぎたてたものだった。それだけでなくまるで自分たちが描いたもののようにその絵に夢中になり、よその町の子供らを引っ張ってきては自慢してみせるのだった。

そうした子供らの中でも、美英はとりわけ忘れがたい女の子だった。

ぼくの家までクレヨンをもってきてくれたり、学校で鉛筆や鉛筆サックをくれたりした美英。一年生のときの、あれはいつごろのことだろう。どうしたわけか、ぼくと美英の二人だけがその地下室に取り残されたことがあった。その折ぼくは、思わず美英をぎゅっと抱きしめてしまった。美英はびっくりしてわっと泣きだした。おろおろしてぼくが腕を放すと、美英はだしぬけにその手に握っていた白のクレヨン——そう、あれはまぎれもなく白だった——を差しだし、きれいなお花を描いてみて、といいだした。

白っぽい壁に白のクレヨンで、どんな花が描けるというのだ。今度はぼくのほうがうろたえてしまった。

ほったたがつややかでいつも赤かったその美英も、いまはもういない。一昨年の六・二五の折、遠い遠い日本へ避難して行ったきりいまだに帰らないのだ。

美英はぼくの家のすぐ近くに住んでいた。その家もいまでは、門に「売家」と書いた汚れた紙切れが貼られてある空家になっていた。

いつの日か防衛隊がお屋敷からよそへ移ったら、そのときは是非とももう一度あの地下室の、壁の絵の前に立ってみようと心に決めていたところであつたから、お屋敷の焼け落ちる様子にぼくは絶望めいたものを感じないではいられなかった。

ほんとうはそれほどでもなかったが、ぼくには、まるで市街がすっかり青味がかった濃い霧の中に沈んでいるように思えた。そのうえ、淡い朝の陽射しがそれを包みこんでいたから、あんなに騒々しかった昨夜の銃声や手投げ弾の炸裂する音、野砲の砲声などが、さらには今朝のあの市街の無惨な光景までが、遠い過去の記憶のような気がしてならなかった。僅かに、いままではそのことに気がつかなかったが、にわかにはぼくは、秋がこの盆地の小都市にも忍び寄り、すべてを色褪せたものに変えてしまったと感ずるだけだった。

実際にはもう、まぎれもなく秋は深まっていた。

朝ご飯を食べながら、父が、アカの匪賊どもが山で冬籠りするのに必要な食糧などを掠奪しようとして、不敵にもこの街を襲ったのだと説明してくれた。

兄は、選りに選ってどうして昨夜、襲撃してきやがったんだとしきりに口惜しがった。高校二年生の兄はすでに何週間も前から、親しい友人たちとグループで南海岸への無銭旅行にでかけるプランをたてていた。その、かねてから出発の日と予定していたのがきょうだったから、兄が口惜しがるのも無理はなかった。

わいわいいいながら薄暗い兄の部屋へ集まってきた兄とその友人たちが、おお、輝く南海よ、などと叫んでこっちの顔まで赤くなるような仕種を交じえたりしながらも、とにかく熱心にプランを練っていたことをぼくも知っていた。

「兄ちゃん、ほんとうに文無しにするの」

とぼくが訊ねると、

「当たり前だ、若者の夢ってものはだな、どこへなと旅にでることなんだ。けど、おまえみたいな痩せっぽちなんか、幾ら大きくなつたってこんな真似はできないだろうよ。あっちの部屋へ引っこんで、羊の絵でも描いてごろごろしてろよ、さあ、行くんだ」

といってぼくを追い払ってから、自分たちだけでひそひそ話をはじめたりしたものだ。たつた。

兄は、パルチザンの襲撃があつたのだからいつもより警戒がよけい厳しくなるだろうし、そうなれば長距離旅行はどうてい無理かもしれないというので、心配だつたのだ。父は、ばかなやつだ、だからわしが、端からそんな無茶なことは考へるなどあれほどいつとるのに聞き分けがなかつたが、とうとうアカの匪賊どもまでが山から降りてきおつたじゃないかと、理屈にもならないことをいって叱りつけた。とんだヤブヘビに、兄はいよいよよくさつていた。

学校へ行けば昨夜の騒ぎで面白い話がたくさん聞けるはずだつた。ぼくは早くも、同級生たちが片時も休まず喋りたてるその口ぶりが眼に浮かんで来るように、胸をわくわくさせた。ぼくは手早に教科書やノートをカバンにつめ、坂道を飛ぶようにして駆け降りた。駆け行く途中の曲がり角で、ぼくは允姫姉さんにばったり出会つた。

「あんたの家は、無事だつたの」

といつて、允姫姉さんのほうから先に声をかけてきた。ぼくはうなずいて見せた。女子高校の制服ではなしに、チョゴリとチマ（韓国の女性が着る上衣とスカート）姿の允姫姉さんを路上で眺めるのは初めてだつた。ぼくの家の近所に住んでいるので姉さんと呼んでいたが、ほんとうは赤の他人だつた。

ある日ぼくは、呆れるくらい芯の太い4Bの図画鉛筆を允姫姉さんからもらったことがある。ところが、その鉛筆を教室で盗まれてしまったものだから、姉さんと顔を合わせるたびにそのことで何がなし罪の意識に駆られ、ぼくは肩身の狭い思いをさせられるのだった。けれども、今朝ぼくが姉さんの前でもじもじしたのは、そうした「罪の意識」からではなかった。にわかに忍び寄ったうら哀しいまでの秋の気配の中で允姫姉さんが、チョゴリとチマというよそおいのせいで水が蒸発するように、どこへともなくふわふわと飛んで行ってしまふような気がしたからだ。

「あたしんとこの親戚も、幸い何ともなかったわ」

允姫姉さんはにっこりして快活に話した。安否が気遣われ、親戚を訪ねて帰るところらしかった。姉さんはまだおとなにはなり切っていなかったが、家族といってもお母さんとぼくより年下の妹との三人暮らしだったから、家ではそれなりにおとなの務めをはたしていた。

ぼくも姉さんにつられて笑いながら、もう一度うなずいて見せた。すると姉さんは、肝をつぶすようなニュースを教えてくださいました。

「パルチザンが一人、死んだのよ。あんた、知ってる」

しかも、ぼくたちがいま立ち話をしている場所からさほど遠くはないレンガ工場に、銃で撃たれて死んだというそのパルチザンの屍体がうつ伏せになって転がっているというのだ。

「ほんと、見たの」

と、ぼくはちよっと黙りこんでから、思い返しても哀れなくらい自信のない声で、けれどもなじむような口調で問い返した。

「ええ」

姉さんの返答が短いその一言だったから、ぼくはきっとほんとうだろうと思った。

うつ伏せになって転がっているバルチザンの屍体。自分の眼でまだ見てはいなかったが、ぼくにはそれがはっきりと眼に浮かぶようだった。

すると、昨夜の銃撃戦以後のもろもろのこと、鼓膜をつんざくかと思われた轟音や、それによる興奮をすっぱりと包みこむようにして訪れた今朝の異常なまでの静けさなどは、その実、あっさりと遣り過ごしてもよい悪夢の類ではなくて、いまこそなまなましく想像されるバルチザンの屍体を、ぼくに残してくれるためのものだったという思いが実感をともなって甦ってきた。

「あんた、行ってみたいの」
允姫姉さんが氣遣わしげなまなざしで訊ねた。ぼくはちょっと顔を上げて、姉さんの表情をじっとみつめた。形の整った鼻の頭に宿っていた汗の露が、光って見えた。

ぼくは素早く眼をそらして、

「それ……面白い」

と、わざとおどけた口調で問い返した。

「ええ、面白いわよ」

姉さんもつりこまれて、はっきりとそう答えてしまった。ぼくはくすくす笑いだした。姉さんもぼつが悪そうに笑った。

「じゃあ、ね」

ぼくは姉さんにそういい捨てると、もうちょっとスピードを上げて一目散に学校をめざした。姉さんにそういわれたからといって、すぐさまその足で屍体が転がっているというレンガ工場へ駆けつけるのは、何となく氣恥ずかしかった。が、それにもまして、たったいま胸に甦ってきた実感を、時間をかけて少しずつゆっくりと噛みしめてみたい氣持ちから、ぼくは脇目もふらずに学校をめざしたのである。

背中のカバンの中でかちやかちやと筆箱が鳴る音を耳にしながら、ぼくは精一杯走りつづけた。校門の前まできた時分にはもう、息切れがして喉が引きつるようだった。

案に違わず、同級生らは校庭へでて校舎の壁にもたれ、日なたぼっこをしながら昨夜の出来事についてあれやこれやと語り合っていた。中には、上履きの袋いっぱい拾い集めた、銃弾の薬莖を見せびらかす同級生もあった。どの生徒も薬莖の二つや三つは拾ってもっていた。

道立病院の近くに住んでいる同級生の一人は、燃え盛る火が病院を呑みこんでいく勢いを見て、いまにも自分の家へ燃え移って来るように思え、家財道具などを外へ運びだしたのだが、その際自分も、おとなたちに混じって独力で一俵の米を担いで運びだしたと、とうてい駄法螺とは思えないことを吹聴してまわっていた。切羽つまって来ると想像もつかないような糞力が湧いて来るものだ、などと口ぶりまでがすっかりおとなびていた。その話を聞いているうちに、ふとぼくは焼け落ちた道立病院を見てみたくなった。

いやほんとうのことをいえば、ぼくは病院より防衛隊本部になっているあのお屋敷のほうを見たかった。いまの自分よりもっと幼かったころのぼくの王宮だった、あのお屋敷の焼け落ちた姿が見たかったのである。けれども、それが無惨な姿に変わりはてたいまとなつては、とてもあそこまで見に行くだけの勇氣はなかった。そこで、道立病院のほうを選んだという次第だった。

ぼくはその同級生と、廃墟と化した病院をいっしょに見に行くことを約束して、指切りげんまんをした。

午後になったらその子の家へ行くことにして、おもむろに周囲の同級生たちを見まわし、隠しておきたい気持ちのほうがずつと強かったぼくの重大ニュースを、おごそかに口にした。

ぼくの正直な気持ちからすれば、そのニュースは自分だけの胸に秘めておきたかった。しか